

OPINION オピニオン・スライス SLICE

能楽師

大槻裕一さん

能の魅力

—能の魅力について教えてください。

一番難しい、そしてよく聞かれる質問ですね。

僕の初舞台は2歳でしたが、小学校時代はお囃子が好きだったり、能面が怖いとか、衣装がきれいだなと魅了されました。能面や能装束といった優れた美術工芸品を直に鑑賞できること、歌舞伎や文楽と違って省かれた動きで演じることも、能の魅力だと思います。

離見^{※1}の見—能舞台で演じるということ

—面をつけたときに見える世界はどのようなものですか。

「離見の見」をどのように体得されているのかお聞かせいただけますか。

大阪弁護士会
Osaka Bar Association since 1880

能面（目の部分）には小さな穴が2つあり、実際に顔につけたときにはその2つの穴が合わさり1つの点に見えます。しかし、視界は非常に悪く距離感も良く判らない状態です。足下などは見えません。面をつけると能舞台の「柱」の位置を確認しながら演じることが最も重要なこととなります。特に能舞台の前方に2本、後方に2本、合計4本の柱がありますが、この4本の柱のうちとくに前方の右側（観客席から見て一番左手前）の場所にある柱を「目付柱」と言います。この「目付柱」を頼りにして（位置関係を確認しながら）舞っています。

教え—600年以上の伝統を支えるもの

—指揮者がいないのに舞の演技と小鼓や笛、謡などの音曲が、「ピシリ」とタイミングが合いますよね。迫力があがり、感動しますが、どのようにしてタイミングを合わせていらっしゃるのでしょうか。

そうですね。「小督^{※2}」という曲で言うと、「ここで速くなる」とか「ここは月を眺めるシーンなので静かに」などの記載は、謡本^{※3}にははされていません。それこそ「教え」です。僕たちのお稽古は、師匠が直々に「ここはもう少し長く」「ここはもっと速く乗って謡う」と伝えてゆく、これを一つ一つ積み重ねます。これらの積み重ねを乗り越えた四拍子と演者が舞台上に

最小限の舞
で構成されるが
想像力を掻き立てる
壮大なミュージカル

Profile

平成九年、大阪生まれ、同志社大学文学部在学中。
大槻文蔵に師事し、二歳のとき、赤松裕一の名前で、「老松」の仕舞を勤めて初舞台。
十七年、「俊成忠度」で初シテ。二十三年に半能「石橋」の赤獅子を抜く。平成二十五年、大阪の能楽界の第一人者である大槻文蔵の芸養子となった。本名の赤松裕一から、大槻裕一へ。
それは能楽師としての新たなスタートだったといえる。二十五年には初面として、「翁・父之尉延命冠者」の千歳を清々しく勤めた。
一昨年、移動式能舞台を大阪城天守閣前本丸広場に設置、大阪城の天守閣をバックに新能を開催する。
第一回の一昨年は自ら望んで「石橋」を「大獅子」の小書き（特殊演出）で上演、昨年は四日間連続公演を大阪城にて新能を企画。二十七年に「乱」を抜く。師父文蔵と「大槻文蔵裕一の会」を主催。

Interview with
Yuichi Ohtsuki

集まると、全員が、先人から受け継いだスピード、乗り、間が自然と合う、素晴らしいものができるのです。

能の600年以上の伝統芸は、このようにして受け継がれてきました。一つ一つの流派、例えば、大槻家に伝わる芸風というのが受け継がれていくということです。

本業一守るもの、拓くもの

——能において、法律家でいうところの憲法に当たるもの、つまり、基本中の基本、みたいなものはありますか。

謡本などがそれに当たるのではないのでしょうか。観世流の謡本自体は一つですが、流派ごとや家の教え、例えば大槻家であれば、謡本のここはどのように舞うということが記されています。

それから、能の精神、心構えなど「こういうお稽古事が必要だ」ということであれば、「風姿花伝」じゃないでしょうか。この中に書いてあることが謡本の中に活かされて、演者がそれらを取り込んでやっていくということだと思います。

——能は、鎮魂の芸能と呼ばれていますね。

お殿様や將軍様が能を観ていた時代は、「安宅^{あたく}」とか「羽

衣^{※5}」とか、どちらかと言えばショー的な演目、賑やかなもののほうが流行していたと聞いています。

その時代時代に合った演目がありますね。

現代、能は、鎮魂の芸能と言われていますが、例えば、亡霊が出てくる話などは今の時代に合った曲だと思います。例えば「善知鳥^{うとう※6}」など地獄の苦しみを現した曲など。

やはり基本が大事

——能役者さんもやはり基本が大事ですか。

はい、僕は、大槻文蔵先生からお稽古をつけていただく約20分前にこの舞台に来て、15枚あるこの舞台の板を1枚ずつ「すり足」で歩いています。すり足が一番大事なんです。すり足というのは、かかとを絶対に上げたらだめでふわふわしてはいけないんです。舞台上で演じるときは、床にどれだけ長く足をつけているかということに集中することはできません。せりふ、謡、次はどっち向かなどと考えていますから…。だから、稽古前の20分間、すり足のことを考えて歩きます。これは小学校3年生のころから続けています。体力的にも結構きつく、太ももあたりがばんばんになりますね。

能役者冥利に尽きると お感じになったことは？

すばらしい師匠に出会えたことにつきます。笛、小鼓、大鼓、太鼓の四拍子を習いますが、笛と小鼓はお家元で大鼓と太鼓は人間国宝の先生です。「乱」を演じた時は、笛と大鼓と太鼓が自分の師匠でした。先生方は、笛が藤田六郎兵衛先生、小鼓が大倉源次郎先生、大鼓が亀井忠雄先生、太鼓が三島元太郎先生です。能のお師匠が大槻文蔵先生です。お稽古後に師匠と会話する時間は、雲の上にいる先生方の近くにいることができて本当によかったと思います。先生方と一つの演目をつくるときに、先生方や師匠の大槻文蔵先生が後ろに楽器で並びます。そのとき、「下手でも上手でも僕たちが何とかしますよ」「好きにやってください」という雰囲気僕自身全部をサポートしてくれるという、あとは自分たちで何とかするからみたいな感じに包まれます。自分が今までやってきたお稽古を全部思い切って出せるのです。

いろんな人に能を観てもらいたい ——小学生に、仕事帰りに

今年の1月、2月は文化庁の催しで沖縄、鹿児島の小学校28校を回り、本公演とワークショップをしました。本公演の演目選びは小学生が観るのでごく難しかったです。正義の味方が悪と戦うという演目が判りやすいので、一番生徒の反応が良いのは「土蜘蛛^{※7}」です。正義の味方が完全にクモを倒す。蜘蛛



の巣が舞台で大きく広げられる演出も忍者のようですから興味を引きます。ほかに最近僕たちが頭をひねって出てきた演目が「大会」です。よかれと思ってやったのに後でものすごく怒られてしまうというお話です。電車でおばあさんに席を譲ろうと思ったら、私はおばあさんじゃないからと怒られるみたいな、どこか現代につながるというか、ちょっとコミカルな話です。

また、大槻能楽堂ではナイトシアターという平日夜の公演を行っています。なぜ夜にするのか?という、仕事帰りの疲れた方にも能をみて癒されてほしいからです。うちの先生がよく言うのは、「能を見て寝ているお客さんは結構いらっしゃるがそれは絶対にいいことなんです」と。すごく集中していて、調和を感じて、一番リラックスしているから寝られるんです。能の舞や装束を見て、「本当にきれいだな」とちょっとでも癒やしになってもらえればいい。仕事をさせてすごく大変な思いをして疲れている方こそリラックスして頂けるように、いつもとは少し違う方々に来ていただきたいの思いです。

——どんな能役者になりたいとお考えですか?

師匠の大槻文蔵のような能役者になりたいです。舞台も素晴らしいし、ご自分で大槻能楽堂を持ち、ご自分で運営もされています。このように個人でやっているというのは師匠だけです。能には本来興行主というものがいません。だから全てが自主公演です。東京の国立能楽堂は、国が運営して月に何回か能の催しをしています。ここは違います。公演がなければ役者として成長できないし、経験もできない。公演主になり、自ら企画をし、自ら出演することを目指しています。一人でも多くのお客様に能を見ていただける機会を自分からつくる、そして、お客様を増やしていくことが大事だと思います。能を演じるということ以外でも師匠は素晴らしい、能面の扱い、能装束のこと等全てのことで尊敬しています。どうやったらすばらしい舞

INFORMATION



平成28年12月24日(土) なら100年会館
『鷹姫』チケット好評発売中

台をつくれるのか、「能をつくる」ということをしたいですね。

——移動舞台を作られたとのこと、弁護士会館にも是非来てほしいです。

大阪城で夏に薪能をしているのですが、これは移動舞台で演じています。弁護士会館でも可能ではないかと思えます。ありがとうございます(笑)。

——是非是非お越し下さい。本日はお忙しいところ本当にありがとうございます。

(Interviewer: 小橋り／Photo: 高廣信之)

※1 離見の見(りけんのかん) 世阿弥の名言。離見(客観的に見られた自分の姿)を自分自身で見ることが重要であり、自分の見る目と観客の見る目を一致させるべきという考え

※2 小督(こご) 帝に寵愛を受けた小督という女性の悲恋もの。小督は京都の嵯峨野に隠所したが、帝の使いが小督の琴音を便りにして探し当て、帝の手紙を小督に渡す。小督は帝の思いに触れ、感泣し、遣いに返書を持たせ、酒宴を開きその遣いが男舞を舞い、小督の返書を懐中にして都に帰る。

※3 謡本(うたいぼん) 謡曲・古用の謡本。各流派が慣習的に版權をもっている。初期には心覚え程度の簡単な節付けであったが、しだいに詳細になり、間拍子・装束付・演能の図・小書による異同等がつけられるようになった。

※4 安宅(あたか) 頼朝から追っ手をかけられた義経と弁慶ら従者が富樫という関守が守る安宅の関を越えるときの物語。弁慶は関を通過させまいとする富樫に対し、東大寺建立勸進のための山伏らに対する非礼を責め、富樫はまた弁慶が朗々と歌い上げる勸進帳でいったんは関の通過を許すも、義経らしき強力に疑念を抱く。従者らは我慢できず刃傷沙汰にしても関を通過しようとするが弁慶が金剛杖で押しとどめるシーンの迫力は相当である。結局富樫は義経ら一行の関の通過を許し、弁慶に非礼を詫げるために弁慶に酒をふるまう。弁慶は安堵と喜びで酒盃を重ね、男舞を舞い、陸奥へと下っていく。歌舞伎では「勸進帳」という演目名で知られる。

※5 羽衣(はごろも) 三保の松原にきた漁師が松の枝にかかっている美しい衣を家に持って帰ろうとしたら、その衣がなければ天上世界に帰れない天女が衣を返してもらうために美しい舞を次々と披露するという物語。能装束の華麗さ、能面の美しさは比類ない。

※6 善知鳥(うとう) 「うとう」という鳥を殺して生計を立てていた獵師が、死後亡霊となり、生前の殺生を後悔し、一方でそうしなければ生きていけなかったわが身の悲しさを嘆く物語。人生の悲哀と地獄の苦しみを描き出す哀しく激しい演目。

※7 土蜘蛛(つちぐも) 病床にある源頼光のもとへ侍女が薬をもって見舞いに来るが一向に良くならない。そこへ僧形(僧のような姿をしたもの)が現われて真方の病氣は私のせいだと言い、蜘蛛に似た化物となり、蜘蛛の糸を投げつけてくる。頼光は蜘蛛の糸で苦しみ、枕元の刀で切りつけるとその化物が消えた。頼光の異変を聞きつけた独武者に異変を一部始終語る。独武者は、流れた血をたどって化物退治をするべく仕える下人らとともに化物の住む古塚を崩そうとする。そこへ土蜘蛛の精が現われ、独武者らと戦いが起こる。独武者らが土蜘蛛の首を切り落とし、都へ帰っていく。蜘蛛の糸を投げかけるシーンは例をみない幻想的で美しい。

※8 大会(だいえ) 比叡山の僧のところに、天狗が現われて、命を助けてもらった報恩のために僧の望みをかなえたいと申し出る。僧は、お釈迦さまの説法の光景を目の当たりに見たいと言う。天狗は、ほんのパンノラマをお見せするが、本気で信心を起こさないという条件で約束させていったん消えた。僧が約束の場所に赴き、閉じた目を開けると、目前に荘厳な釈迦の説法が展開されていた。あまりの有難さに僧は随喜の涙をこぼし、天狗との約束を忘れて思わず本気で拜んでしまった。すると神聖な仏法を天狗ごときが弄んだと帝釈天が憤慨し、そこに駆け付けた。帝釈天は幻の大会をめっちゃに天狗を痛める。天狗は帝釈天の怒りに恐れをなし、平身低頭詫言を入れ、大会(説法の場に仏様が集まること)の光景は消えて天狗は岩ほらへ逃げ込むという話。